

## 日本における夢研究の展望補遺 (V)

### 獺と伯奇の問題

名 島 潤 慈\*

## A Supplement to a Historical Perspective of Dream Research in Japan (V) The Issue of Baku and Hakki

Junji NAJIMA

(Received November 14, 1997)

In Japan it has been said that the animal which eats foul dreams or nightmares is mo 獺(Baku). However, as clearly noted in Hou Han shu 後漢書, the chinese dream-eating animal was Po-ch'i 伯奇(Hakki). Chinese mo had eaten iron, copper and snakes instead of dreams. Needless to say, in the transmission of any image of magical creature, deletions, accretions, and other alterations are inevitable. In the paper the author tries to conduct research on the apparent confusion of Po-ch'i and mo.

### I 本稿のねらい

山岳信仰に基づいた中国古代の有名な地理書に『山海経(せんがいきょう)』がある。『山海経』の原型は紀元前3世紀ころまでにできあがっており、司馬遷の『史記』にもこの書名が挙げられている。清の郝懿行(1757-1825)の『山海経箋疏』18巻を底本とした前野(1975)の訳による『山海経』の中の「西山経」には、鵲鵲(いよ)という鳥のことが記されている。当該の箇所は次のようなものである。[ ]の中は、晋の郭璞(276-324)による『山海経注』のものである。

鳥有り。其の状は鳥の如く、三首六尾にして善く笑ふ。名けて鵲鵲と曰ふ。[猗餘の両音]。之を服すれば人をして厭せざらしむ。[夢に厭せられざるなり。『周書』に曰く、服する者は昧(ばい)せずと。音は莫礼の反。或いは昧(ばい)と曰ふ、目を昧するなり]。又以て凶を禦(ふせ)ぐ可し。

前野によれば、文中、服は鵲鵲の毛皮や羽毛などを身につけるという意味と、鵲鵲の肉などを食べる(服用する)という意味の2つが考えられる。厭はうなされること。つまり、頭が3つで尾が6本ある鵲鵲という鳥を身につけるか食べるかすると、その

人は悪夢にうなされなくなるし、また、災いを避けることができるというわけである。

唐の段成式の撰による『酉陽雜俎』(今村訳注, 1980)の巻三、貝編、仏教経典録異には、夢に現れる歡喜虫という名が記されている。今村の注釈によれば、この歡喜虫は憶念虫と共に、人間の身の髄の中にいる10種の虫の中の2つであり、どちらも夢を見させる働きをするとのことである。[歡喜虫と憶念虫の出典は元魏の瞿曇般若流支訳による『正法念處經』。大正新修大藏經第十七巻經集部四所収の『正法念處經』(高楠編, 1925)の巻第六五、身念所品之二によれば、当該の箇所は、「若虫歡喜有力。多見諸夢。或善不善。以虫過故。以虫流行。於心脈故。夢見衆相。觀憶念虫已。」である。]

中国最古の医書である『黄帝内經』から後に分巻されたとみなされている『素問』の脈要精微論篇には、「短虫多きときは則ち聚衆することを夢み、長虫多きときは則ち相撃ちて毀傷することを夢みる」と記載されている(丸山, 1988)。

このように、動物と夢とは無関係のものではない。

ところで、よく知られているように、悪夢を食べる動物は日本では獺(獺)であるが、中国では伯奇である。本稿ではこの問題を整理検討してみたい。なお、旧漢字は差し支えない限り現行漢字に改めた。以下、中国の獺、日本の獺、中国の伯奇について吟味したい。

\* 心理学科

## II 獺

### 1 中国の獺

中唐の白居易(772-846)の「獺屏讀序」によれば、獺は、「象鼻犀目、牛尾虎足、南方山谷の中に生じ、その皮に寝ぬるときは瘡を辟け、その形を図すれば邪を辟く」という(大槻, 1982: 白川, 1984)。寺島良安(1712 執筆?)の『和漢三才図会』(島田ら訳注, 1987)によれば、明の李時珍撰の『本草綱目』には、獺皮で寝ると温瘡、湿気、邪気を辟けることができる、その形を図しただけでも邪を辟けることができる、唐の時代には多く獺を画いた屏風を作ったとあるとのことである。ちなみに、白川(1984)は「字統」の中の「獺」の項目において、「神異経に名を鑿鉄といい、鉄を食い水を飲むという」と述べている。確かに、貞享5年(1688)中村孫兵衛刊本の『神異経』(古典研究会発行, 1974)には、「南方に獸有り。角足はなほ小さし。形状は水牛の如く。皮毛は黒きこと漆の如し。鉄を食い水を飲む。その糞兵器に為すこと可なり。その利きこと剛の如し。名を鑿鉄(けつてつ)と曰う」とある。ただし、鑿鉄が獺であるとは明記されていない。[『神異経』は漢の東方朔の撰と言われているが、実際は晋代以後、誰か神仙家の手に成ったものらしい。]

ところで、前述の『山海経』には、獺と思える動物がいくつか出てくる。以下、列举してみる。

(1)猛豹: 『山海経』の中の「西山経」には、「猛豹」というのがいる。この動物は、『山海経注』によれば、「熊に似て小、毛は浅く光沢有り。能く蛇を食らひ、銅鉄を食らふ。蜀中に出づ。或いは虎に作る」である。そして、これは、清の汪紱(1692-1759)による『山海経存』と『山海経箋疏』によれば獺とのことである。なお、『山海経箋疏』は、「獺豹」の発音がなまって「猛豹」になったのだと説く。

(2)狢: 「中山経」には江水がそこから出る崓山(邛來山)の記事がある。この崓山には、『山海経注』によれば、「熊に似て黒白の駁。亦銅鉄を食ふなり」という「狢(はく)」がいる。『山海経広注』はこの狢を獺のこととしているとのことである。

(3)膜大: 同じく「中山経」には「膜大の如く」という言葉がある。この膜大について言えば、『山海経存』は「膜」を獺のこととし、「大」を犬の誤りとして、獺犬は白豹のこととする。清の呉任臣(?)による『山海経広注』も膜をやはり獺のこととし、『南中志』に鉄を食う獸として獺犬の名があることを指摘する。『山海経箋疏』は獺犬として、『穆天子伝』の郭注に

「西膜は沙漠の郷」とあるのを引き、膜犬は西膜、つまり西方の沙漠地帯に産する犬のこととする。

『列子』(麦谷訳, 1983)の天瑞篇には、「羊奚は筍せざる久竹に比すれば青寧を生じ、青寧は程を生じ、程は馬を生じ」云々とある。この文の中の程は、殷敬順の釈文に「尸子にいう、程は中国之を豹と謂い、越人之を獺と謂う」とあるように、豹でも獺でもある。中文大辞典第三十一冊(中文大辞典編纂委員会編, 1968)の「獺」の項には、「爾雅」の釈文に「獺白豹」(獺は白豹なり)とあるとしているが、このことは、殷敬順の釈文と重なる。

このようにしてみると、中国の獺はおそらく鑿鉄(鑿鉄)・猛豹・狢・膜大・(白)豹といった多くの異名を持ち、銅・鉄・蛇を食べる。そして何よりも、瘡(はやりやまいの意)、温瘡(温気によっておこる疫病)、邪(病気を起こす悪い気)などを避ける力を有した動物として記述されている。

しかしながら、獺が夢を食べるという話は、中国には見当たらない。もっとも、この点に関して、『中文大辞典』第二冊(中文大辞典編纂委員会編, 1962)の中の伯奇の項目の①には、「食夢之獸名。獺。」とある。しかし、この項目の出典としては、後述する『後漢書』礼儀志の中の一節、「攬諸食咎伯奇食夢」が引用されているだけである。このようにしてみるとやはり、中国の獺は夢を食べないと言えよう。

### 2 日本の獺

一方、日本の獺は、室町時代の『文明本節用集』に「獺は熊に似て、黄黒色。蜀に出ず。能く銅鉄又は悪夢を食う」とあり(日本大辞典刊行会編, 1975)、江戸時代の『無双大雑書』に「獺といへる獸はあしきゆめを喰ふ」、同じく『夢合長寿宝』に「この獸を枕及び衾に画けば悪夢を喰ふといへり」とあるように(江口, 1987)、悪夢を食べる。つまり、日本における獺は中国の獺の機能に「悪夢を食べる」という機能が付加されたものである。獺の効能としては、『夢合長寿宝』に「瘡瘍湿邪を辟る。白氏文集に見えたり」とあるので、当然のことながら中国と大差ない。

ちなみに、貝原益軒(損軒、篤信)は、彼が宝永5年(1708)、79歳の時に完成させた『大和本草』の中の巻之十六の「獺」の項において、「日本の俗、獺は、人の悪夢を食とて、枕に絵かく。然ども中華の書にて、いまだ見ず」と断言している(益軒会編纂, 1911)。また、益軒の甥の貝原好古が貞享5年(1688)に編録し、益軒が刪補した『日本歳時記』(島監修、

1977)では、「夢を食ふといふ事は いまた其説を見侍らす 但 続漢書に 大饗の時 伯奇といふ神食夢と云事侍り 山海経にもしるせり されとも貌の事なし 殊に夢ハ睡中の思想にして 形あるものにしあらねハ これを食ふといへるも ことほりなき事にそ侍る」と述べられている。

### III 伯 奇

#### 1 中国における伯奇と饗

伯奇の出典は貝原好古や西岡(1966)が既に指摘しているように、「後漢書(続漢書)」であり、伯奇は饗(だ)の儀式、つまり饗儀と関係している。饗とは、簡単に言えば、疫癘(はやりやまい)の鬼を殴逐することである(中村, 1990)。いわゆる鬼やらいのことである。陰気を追い払って陽気を迎え入れる儀式と言ってもよい。饗儀は後年、芸能的・娯楽的要素の濃い饗戯となっていく。

饗儀は古くからある。例えば、孔子(B.C.552-479)の言行録である『論語』(金谷訳注, 1963)の「郷党」には、「郷人(村人の意)の飲酒には杖者出ずれば斯に出ず。郷人の饗には朝服して阼階に立つ」とある。

張(1990)によれば、鬼やらいの行事は現在でも湖南省や湖北省で見ることができる。それは「跳饗」と称されており、戯曲では「饗戯」となっているとのことである。近年の中国の農村を詳しく実地調査した廣田(1997)によれば、例えば江西省南西部の南豊県の村々では饗神廟を中心に旧正月に追饗行事が行われている。中でも南豊県の石郵村のそれは方相氏以来の古い形を保っている貴重な例で、祭りは起饗・跳饗・搜饗・圓饗という4つの段階を経て進められる。もっとも、疫や災いを追うのは昔の方相氏ではなくて、大鬼・開山・鐘馗といった神々(実際にはこれらのお面をつけた人々)なのであるが。さらに、寒(1992)によれば、山西朔州一带には「喜楽」がある。喜楽とは、資産の少ない家が巫師を招いて行う小規模の饗祭である。家に病人が出たり、不運な目にあったり、悪夢にうなされたりした時に喜楽という祭祀演技をしてもらい、それによって凶を吉に変えようとするわけである。その他、台湾には、古代の鬼やらいの名残として、瘟醮(ウンチョ)(王醮)がある(劉, 1994)。

さて、宋の范曄撰、唐の李賢等注の『後漢書』(中華書局出版編, 1965)の礼儀志の大饗の項によれば、漢代の饗は次のようなものである。まず原文を掲げ、次に守屋訳注(1978)ならびに中村(1990)等を参考にしながら、口語的に和訳する。( )の中の漢字

は補足である。

先臘一日、大饗、謂之逐疫。其儀..選中黃門子弟年十歳以上、十二以下、百二十人為侏子。皆赤幘皁製、執太鼗。方相氏黃金四目、蒙熊皮、玄衣朱裳、執戈揚盾。十二獸有衣毛角。中黃門行之。冗從僕射將之、以逐惡鬼于禁中。夜漏上水、朝臣會、侍中、尚書、御史、謁者、虎賁、羽林郎將執事、皆赤幘陞衛。乘輿御前殿。黃門令奏曰..「侏子備、請逐疫。」於是中黃門倡、侏子和、曰..「甲作食凶、肺胃食虎、雄伯食魅、騰簡食不祥、攬諸食咎、伯奇食夢、強梁、祖明共食磔死寄生、委隨食覩、錯斷食巨、窮奇、騰根共食蠱。凡使十二神追惡凶、赫女驅、拉女幹、節解女肉、抽女肺腸。女不急去、後者為糞！」(以下、略。)

臘(日)に先だつ一日、大饗す。これを疫を逐うという。その儀式は、中黃門の子弟の年齢十歳以上、十二(歳)以下、百二十人を選んで侏子(しんし)となす。皆赤幘皁製(せきさくそうせい)して太鼗を執らす。方相氏は黄金の四目、熊の皮を蒙り、玄衣朱裳して戈を執り、盾を揚げる。十二獸は毛角の衣で、中黃門がこれを行う。冗從僕射がこれをついて、以て惡鬼を禁中より逐う。夜漏(夜の水時計の意)、水を上せて朝臣會し、侍中・尚書・御史・謁者・虎賁(こほん)・羽林郎將、事を執り、皆赤幘して陞衛す。乘輿、前殿に御す。黃門令が奏して曰く..「侏子備われり、請う疫を逐わん。」是において中黃門唱う。侏子和し、曰う。「甲作は凶を食らい、肺胃(ひつい)は虎を食らい、雄伯は魅を食らい、騰簡は不祥を食らい、攬諸(らんしよ)は咎を食らい、伯奇は夢を食らい、強梁と祖明は共に磔死と寄生を食らい、委隨は覩を食らい、錯斷は巨を食らい、窮奇と騰根は共に蠱(こ)を食らう。この十二神をして、惡凶を追わせ、女(なんじ)の軀を赫(ひきさ)き、女の幹節を拉(ひし)ぎ、女の肉を解(やぶ)り、女の肺腸を抽(ひきぬ)かん。女ら急に去らずして後(のこ)るものあらば、糞(えじき)となさん」と。(以下、略。)

これにみるように、伯奇は(惡)夢を食べる動物である。

#### 2 伯奇と夢

伯奇が悪夢を食べるということは、「敦煌本白澤精怪図」(the Tun-huang manuscript Pai tse ching

kuai t'u: the Tun-huang manuscript White Marsh's Diagrams of Special Prodigies) の中により明確に記されている。「敦煌古俗と民俗流変」(高国藩, 1989) の第7章「敦煌本《解梦书》与梦的解释」によれば、「敦煌唐人写本白泽精怪图(白澤精怪図)」の中の当該の一節は、「人夜得恶梦, 旦起于舍, (向) 东北被发咒曰, 伯奇! 伯奇! 不饮酒, 食六(家)常食, 高兴地, 其恶梦归于伯奇, 厌恶息, 兴大福, 如此七咒, 无咎也」である。この中の簡体字を日本の現行漢字に直して全文を書き改めると、「人夜得悪夢, 旦起於舍, (向) 東北披髮呪曰, 伯奇! 伯奇! 不飲酒, 食家常食, 高興地, 其惡夢帰於伯奇, 厭惡息, 興大福, 如此七呪, 無咎也」となる。[文中, 食六の六は穴の誤字とみなした。穴は家である。なお, 白沢(澤)・獺・伯奇という3つの神獣の相互関係はよく分からない。「敦煌本白澤精怪図」の中に伯奇のことが記載されていることからして, 伯奇と白沢は同じであろう。また, 白沢と獺を同一とする見解もある。しかし, 江戸時代の『和漢三才図会』(島田ら訳注, 1987) の巻第三十八, 獣類の中の白沢と獺の絵はまったく似ていない。白沢は獅子のような形状で, 獺はありくいのような形状である。もちろん, 白沢が悪夢を食べるとは書かれていない。ともあれ, 三者に共通するのは辟邪である。白沢の効能に関して言えば, 葛洪(284-363)による『抱朴子』(石島訳注, 1942) の巻十七, 登涉篇には, 「其次は則ち百鬼録を論じて, 天下の鬼の名字及び白沢図, 九鼎記を知れば, 則ち衆(もろもろ)の鬼も自ら却き」云々とあるように, 白沢を描いた白沢図は鬼を退ける効果があるとされていた。]

このように, 人が悪夢を見た時には家の中で東北を向き, 髪を解きほぐして呪文を唱えるわけである。この呪文の内容は意識すれば, 「伯奇よ! 伯奇よ! (伯奇は) 酒を飲まず, 食家は喜んで常食す。願わくは, これらの悪夢が伯奇のもとに帰らんことを。悪い息を厭い, 大いなる福が興らんことを」となる。なお, この一節は既に Harper (1988) によって英訳されているので, 参考までに掲げておく。ただし, Harper の英訳には何箇所か疑問点がある。

When a person has foul dreams at night, rise at dawn, and in the northeast part of the house unbind the hair and chant this incantation: "Po-ch'i, Po-ch'i. He does not drink wine or eat meat, and regularly eats from the land of High Elation. May these foul dreams return home to Po-ch'i.

Crushing dreams abate, give rise to great blessings." Chant the incantation like this seven times and there will not be spirit odium.

### 3 方相氏

上述のように, 伯奇は中国における儼(『旧唐書』では贈儼)の儀式と関係している。つまり, 熊の皮を被り, 黄金の四つ目の仮面をつけ, 黒い衣と朱の袴を着た方相氏(方相)は, この伯奇を含む12の神獣と偃子(童子)を従えて, 儼声(ダーダーという大声)を発しながら疫(悪鬼)を宮中から追い払ったのである。[方相氏が追うという形式は唐代まで続いた。それ以後は, 方相氏は別のものにとって代わられた。]

ここで方相氏について注記しておく。大形(1995)は, 「方相氏はおそらく祖霊にもとづく神であろう」と述べている。一方, 黄(1991)は, 「方相氏は, もともと『夏官』の編成の中に列せられる軍伍小官であり, 地位は高くないが, 彼が儼祭の中で『熊皮を蒙り, 黄金の四目, 玄衣朱裳, 戈を執りて盾を揚ぐ』という扮装をすると, 疫病を払い魔物を追い払う神通力を持つのである。この変化は, 実際には神の降臨に他ならない。方相氏の身体に寄り憑いた神は, 恐らくかつて黄帝と生死を賭けた格闘を繰り広げた蚩尤(しゅう)である」と述べている。[蚩尤とは, 『莊子』(金谷訳注, 1983)盗跖篇の第二十九に述べられているように, 河北省にあった涿鹿(たくろく)の野で黄帝と戦ったという伝説上の人物のことである。戦いの神様として崇拝され, 各地に蚩尤祠が作られたり, 蚩尤戯(蚩尤を祭るための楽舞)が催されたりした。ちなみに, 白川(1979)は蚩尤を, 東北ツングース系の神ではないかと推定している。]

また, 方相氏の黄金の四目について井上(1996)は, 「この四目は四隅を透視し, あるいは東西南北の四方から来る蠱毒, 悪風に対処するものなのかもしれない」という興味深い考察を行っている。もともと古代中国人にとって, 目は辟邪(魔除のお守り)であった。例えば, 黄目(黄金で作った大きい目のついた酒樽)は, 目を酒樽に付けることによって, 悪鬼によって酒が毒されるのを防いだわけである(深津, 1967)。このような点からすると, 井上の考察は妥当なものと思える。

### 4 日本における儼

ところで, このような儼の儀式は, 当然のことな

がら日本にも伝わった。例えば、『続日本紀』(青木ら校注, 1989)の巻三, 文武天皇の慶雲3年(706)12月の条には、「是の年, 天下の諸国に疫疾(えやみ)ありて, 百姓多く死ぬ。始めて土牛を作りて大儺をす」とある。[「大儺をす」は「大いに儺(おにやらい)す」とも読む。大儺とは宮中の儺(宮廷儺)のことである。この大儺は陽成朝(876-884)の頃より追儺(ついな・鬼やらい)という呼び名に定まったとのことである(小町谷, 1981)。なお, 文中にある「土牛を作りて」云々は, 秦の呂不韋の撰による『呂氏春秋』(塚本編, 1920)巻第十二, 季冬紀に「国人儺し, 九門に磔攘す, 春気を畢す」「有司に命じて大いに儺し, 旁た磔り, 土牛を出し, 寒気を送る」とある。『礼記』の月令季春と月令季冬, 西漢の劉安(B. C. 179-122)の編による『淮南子』(戸川・飯倉訳, 1974)の時則訓にも同様の文句が見られる。]

もっとも, 日本における追儺(大儺)の儀式は, 時間がたつにつれて変質していく。中務省大舎人寮に所属する大舎人の中から選ばれた方相氏はもともと悪鬼を逐う役目であったが, 次第に鬼そのものと混同されるようになった(小町谷, 1981)。例えば, 後二条関白師通の委嘱を受けて大江匡房(1041-1111)が撰進した『江家次第』(故実叢書編集部編, 1953a)の巻第十一の「追儺」の項には「殿上人長端の内に於いて方相を射る」とあり, 尾崎積興の『江家次第秘抄』(故実叢書編集部編, 1953b)には「方相へ鬼」とある。また, 一条兼良(1402-1481)の『公事根源』(故実叢書編集部編, 1951)には, 「追儺といふは年中の疫気をはらふ心也。鬼といふは方相氏の事也。四ノ目ありておそろしけなる面をきて手にたてほこをもつ」とある。つまり, 後になるほど方相氏は, 殿上人や群臣から桃弓と葦矢で射られる鬼そのものと化していったのである。

## 5 日本における伯奇

ここで再び伯奇に話を戻すと, 日本における大儺・追儺の記事は数多くあるが, その中に伯奇という言葉は見当たらない。例えば, 弘仁12年(821)に藤原冬嗣らが撰上した『内裏式』(故実叢書編集部編, 1954)の中巻には「十二月大儺式」の項があるが, そこには, 陰陽師が呪文を読み方相が儺の声を作る云々の記述はあるものの, 伯奇についての記述はない。これは『儀式』(故実叢書編集部編, 1954)巻第十の「十二月大儺儀」の項においても同様である。ただし, 上述の『江家次第』巻第十一の「追儺」の項には「[頭書]裏書云く 儺声を作りて唐志の十

二神の名を唱え, 次いで悪鬼を逐い, 室中に索めて疫鬼を殴る」云々という記述があるので, 日本において(伯奇を含む)十二神が完全に無視されていた訳ではない。しかし, 奈良・平安時代以降の文学作品その他を見ても伯奇についての記述は見当たらないようである。伯奇は日本においては完全に無視された訳ではないものの, ほとんど注目されることがなかったと言えよう。

## IV 獺と伯奇

日本では, 夢を食う獣として, 中国の伯奇の代わりに獺が強調されてきた。おそらく室町時代のころから, 宝船の風習と共に獺が夢を食う動物とされたものと思える。

それにしても, なぜ伯奇が獺にすり代わったのであろうか。理由がよく分からない。もともと獺には辟邪の機能があり, しかも, 中国においてさえ民間において獺を辟邪として用いる風習があったため, 日本では悪夢という邪を消滅させる儀式として獺が重用されたのであろうか。ここで, 1つの仮説として, 伯は漢音(奈良時代から平安時代初期にかけて伝えられた音)ではハクであるが, 同時に漢音でバクとも発音するので(上田ら編著, 1993), いつしか同じ漢音のバク(獺:呉音ではミャク)と混同されるようになったのではないかとも思える。もっとも, 裏付けとなる資料がないので, これはあくまでも推測に過ぎないが。

## V ま と め

本稿では, 中国の獺と伯奇, 日本の獺とを資料をもとに整理・検討した。その結果, 従来の識者たちが述べているように, 中国の獺は夢を食べず, 逆に日本の獺は, 中国の伯奇と同様夢を食べることが再確認された(表1を参照)。伯奇は日本においては, 江戸時代の『日本歳時記』が「続漢書に大儺の時 伯奇という神 食夢と云事侍り」と述べているように, たかだか注釈的にしか記されなかったのである。

夢を食べることのなかった中国の獺が, なぜ日本においては夢を食べるようになったのか, 現時点ではよく分からない。今後の重要な課題である。

[謝辞: 中国関連の資料蒐集に際し, 元北里研究所附属東洋医学総合研究所猪飼祥夫先生と京都市立伏見工業高校山内敏輝先生の御助力を得ました。また, 『敦煌古俗と民俗流変』の中の伯奇の文章に関し, 熊本大学文学部劉静華先生と熊本大学大学院教育学研

表 1 中国と日本における獺と伯奇の比較

獺と伯奇	中 国	日 本
獺の異名 獺の効能 獺の食べ物	鑿鉄（鑿鉄）・猛豹・狛・膜大・（白）豹 瘟・温癘・邪を避ける。 銅・鉄・蛇を食べる。	特になし。 瘟・癘・温・邪を避ける。 もっぱら悪夢を食べる。
伯奇の異名 伯奇の効能	白沢。 特に言及されていない。ただし、伯奇と同一視される白沢は却鬼の機能を持つ。	言及されていない。 言及されていない。
伯奇の食べ物	夢を食べる。	「伯奇食夢」という後漢書の引用のみ。

究科の邱蓓蓓氏の御教示を得ました。記して深謝いたします。]

## 引用文献

- 青木和夫・稲岡耕二・笹山晴生・白藤禮幸（校注）1989 続日本紀 一 岩波書店
- 張 紫 晨 1990 中国巫術 上海：三聯書店（伊藤清司・堀田洋子訳 1995 中国の巫術 その原理から祭り・鬼祓い・招魂・シャーマニズム等まで 学生社）
- 中文大辞典編纂委員会（編）1962 中文大辞典 第2冊 中国文化学院出版部
- 中文大辞典編纂委員会（編）1968 中文大辞典 第31冊 中国文化学院出版部
- 中華書局出版（編）1965 後漢書
- 江口孝夫 1987 日本古典文学 夢についての研究 風間書房
- 益軒会（編纂）1911 益軒全集 卷之六 益軒全集刊行部発行
- 深澤胤房 1967 古代中国人の思想と生活—だましによる欺いについて— 創立九十周年記念 二松学舎大学論集 Pp.31-52.
- Harper, D. 1988 A note on nightmare magic in ancient and medieval China. T'ang Studies, 6, 69-76.
- 廣田律子 1997 鬼の来た道 中国の仮面と祭り 玉川大学出版部
- 今村与志雄（訳注）1980 西陽雜俎 1 平凡社
- 井上 聰 1996 古代中国陰陽五行の研究 翰林書房
- 石島快隆（訳注）1942 抱朴子 岩波文庫
- 寒 声 1992 宗教祭祀に淵源する中国戯劇 日中文化研究, 3, 15-36.
- 金谷 治（訳注）1963 論語 岩波文庫
- 金谷 治（訳注）1983 莊子 第4冊（雜篇）岩波文庫
- 故実叢書編集部（編）1951 建武年中行事略解・御代始抄・公事根源愚考・日中行事略解・嘉永年中行事・嘉永年中行事考證・訓點年中行事 明治図書出版
- 故実叢書編集部（編）1953a 江家次第 明治図書出版

- 故実叢書編集部（編）1953b 江家次第秘抄 故実叢書編集部（編）江家次第 明治図書出版 Pp.531-600.
- 故実叢書編集部（編）1954 内裏儀式・内裏儀式疑義辨・内裏式・儀式・北山抄 明治図書出版
- 黄 強 1991 尸と「神」のパフォーマンス 日中文化研究, 創刊号, 42-68.
- 高 国 藩 1989 敦煌古俗と民俗流交 河海大学出版社
- 小町谷照彦 1981 追儺 山中 裕・今井源衛（編）年中行事の文芸学 弘文堂 Pp.409-421.
- 古典研究会（発行）1974 和刻本漢籍隨筆集 第13集 神異經・西京雜記・搜神記・述異記・今世説（近溪子）明道録 汲古書院
- 前野直彬（訳）1975 山海經・列仙伝 集英社
- 丸山敏秋 1988 黄帝内経と中国古代医学 その形成と思想的背景および特質 東京美術
- 守屋美都雄（訳注）1978 荆楚歲時記 平凡社
- 麦谷邦夫（訳）1983 老子・列子 学習研究社
- 中村 喬 1990 続中国の年中行事 平凡社
- 日本大辞典刊行会（編）1975 日本国語大辞典 第16巻 小学館
- 西岡 弘 1966 吉夢の献 國学院雑誌, 67:7, 1-15.
- 大形 徹 1995 「鬼」系の病因論—新出土資料を中心として— 大阪府立大学紀要, 人文・社会科学, 43, 1-15.
- 大概文彦 1982 新編大冒海 富山房
- 劉 枝 萬 1994 台湾の道教と民間信仰 風響社
- 島 正三（監修）1977 古版本 日本歳時記 さつき書房
- 島田勇雄・竹島淳夫・樋口元巳（訳注）1987 和漢三才図会 6 平凡社
- 白川 静 1979 中国古代の文化 講談社学術文庫
- 白川 静 1984 字統 平凡社
- 高楠順次郎（編）1925 正法念処經 大正新修大藏經 第17巻 經集部 4 大正一切經刊行会発行 Pp.1-417.
- 戸川芳郎・飯倉照平（訳）1974 淮南子・説苑（抄）平凡社
- 塚本哲三（編）1920 呂氏春秋 有朋堂書店
- 上田万年・岡田正之・飯島忠夫・柴田猛猪・飯田伝一（編著）1993 講談社新大字典 講談社